

林檎

豊島与志雄

青空文庫

四月初旬の夜のことだった。汽車は北上川に沿って走っていた。その動揺と響きとに身を任せて、うとうとと居眠っていた私は、窓際にもたせた枕の空気の減ったせいか、妙に不安定な夢心地で、ぼんやりと薄眼を開いた。が、身を動かすのも大儀で、そのままじつとしてしていると、すぐ前の所に、淡い電燈の光を受けて、にこにこ微笑^{ほほえ}んでる男の顔があつた。おや、と思つてよく見ると、仙台で私が乗車した時から、其処に坐っていた男だった。たしかもう十二時も過ぎたこの夜更に、乗客は大抵うつらうつらとしてる中で、一人眠そうな顔もせず、腰掛の上に真直に坐つて、にこにこ笑つてるのである。

変な奴だな、と私は思ったが、それと同時に、初めからそういう感じを受けたのを思い出した。仙台で私が乗込んできた時、前の腰掛には、その男と五十年配の男とが並んで坐っていたので、窓から荷物を取入れる時に私は、窓寄りのその男に向つて、御免下さい、と挨拶をしたのだつた。それが聞えたのか聞えないのか、男は棒のように真直に坐つたまま、返辞はおろか身動き一つしなかつた。私は座席をととのえ、雑誌を少し続け読み、それからうとうと眠つたのであるが、その間彼はじつと、棒のように坐つてたようだった。今もなお棒のように坐り続けながら、ただ独り笑いをしている。

私は斜め正面からそつと、彼の様子を窺つた。夜気に冷えた窓

硝子がぼーっと曇りを帯びるほど、車室内の空気は温まっているのに、彼は黒羅紗のマントに固く身を包んで、二人分の座席の真中に、棒のように真直に坐っていた。鼻が高く細ほそおもて面で、美男の部類にはいる相貌だったが、長い髪の毛の少し垂れかかっている額や、痩せた肉の薄い頬などは、皮膚に色艶がなくてただ白かった。その皮膚の感じが眼にもあった。灰白い膜の——曇りのかかっている、凄くはないが気味の悪い眼付だった。彼はその眼付を斜め向うに据えて、物の匂を嗅ぐかのように小鼻をふくらませながら、にこにここと薄ら笑いをしていた。

その様子を見てるうちに、私は変な気持になって、今眼覚めたような風を装いながら、頭をもたげ身を起して、彼の視線の方向

を辿つてみた。すると其処には、通路を挟んだ一つ後ろの座席に、腰掛の背にもたれて眠っている女の膝を枕にして、五六歳の少女が眠っていた。髪の毛の多い、頬のふつくらとした、一寸可愛い子供だった。

元来子供を余り好かない私は、期待外れの馬鹿馬鹿しい気持ちになつたが、そのために眠気を取失つてしまつて、仕方なしに煙草に火をつけた。すると男は、子供から眼を外らして、私の方をじつと眺めた。私が煙草を二吸いする間、まともに私を見続けた。私は少ししたじろいだ心地になつたが、思い切つて尋ねてみた。

「煙草の煙がお嫌ですか。」

「いいえ。」

口先だけでそう答えて、彼はやはり私から眼を外らさなかつた。それに反撥するような気で、私はまた云つてみた。

「どちらまでいらつしやるんですか。」

「小樽です。」

それでも彼はまだ私から眼を離さなかつた。而もまるで木石ほくせきをでも見るように、私の存在を無視した見方だつた。私は嫌な気持ちになつて横を向いたが、生憎それが先程の子供の方だつた。そして私は暫く、子供の寝顔を睥みつけてやった。

「あなたは子供がお嫌いのようですね。」

ぎくりとして振向くと、男はやはりまじまじと私の方を見ていた。

「ええ、余り好きではありません。」と私は無遠慮に答えてやつた。

「私はまた子供が大好きでしてね……。」

後を続けるのかと思つて見返すと、彼はただにやにやと薄ら笑いを洩らした。その時私は、彼の薄い唇にしまりのないことを気付いた。そして、その弛んだ薄い唇と曇りとを帯びた眼付とから、変に心を乱された。

「そうですね。」

自分でも可笑しいほど時経て私は答えた。けれども彼は平気で、すぐ私の言葉に応じた。

「そうですね。そのために郷里くくにへ連れ戻されるんです。可笑しなこ

とがあるものですよ。」

私はぼんやり彼の顔を見つめた。

「子供を余り可愛がるから、東京に居てはいけないんだそうです。」

そして彼はまたにやりと薄ら笑いをした。

私は呆気あっけに取られて、一寸言葉も見付からなかった。然し彼は私を馬鹿にしているでもなさそうだった。その眼付や口付や笑い方などは、何だか普通でなかったけれど、言葉の調子は落付いた真面目なものだった。私は少し好奇心を動かされた。夜汽車の退屈ざましに私を話相手に選んだのか、または何か他意あつてのことなのか、何れだつて構やしないと腹を据えて、彼の話相手に

なつてやろうと思った。

「余り子供を可愛がるから東京に居てはいけないんですつて……不思議な話ですな。」

「ええ、不思議です。」

それでも彼は、一向不思議でもなさそうに、またにやりと笑つた。

「ではあなたには、お子さんがあるんですか。」

「一人ありました、ずっと昔に。」

「ずっと昔ですつて！」

「ええ、昔のことです。今はありません。」

私はまた彼の顔を見つめずにはいられなかった。見たところま

だ三十以下の年配なのに、ずっと昔に子供があつたというのは、
どう考えても可笑しかつた。がそれよりも私が驚いたことには、
彼の眼は急に曇りが晴れたようになって、底深い空洞うつつろを示してき
た。そして薄い唇にはなおしまりがなくなつてきた。その変化に
私は何となくぞつとしながらも、強いて云つてみた。

「一体どうなんです、全体のお話は。」

「それが不思議でしてね……。」

彼の眼はまた曇りを帯びてきた。そして物に慥えたように、横
手の方を見やった。通路を挟んだその腰掛には、仙台で彼と並
んでいた五十年配の男が、上半身を横たえて眠っていた。それを
見定めておいて、彼はまた私の方へ向き直つた。

「實際不思議ですよ。聞いて下さいますか。」

彼は音をさして唾液つばきをのみ込んで、それから話し出した。

「私は東京の本郷の、根津権現の裏手に住んでいますが、あの根津様の中では、いつも大勢子供が遊んでいます。私は子供が大好きでしてね、子供達の遊ぶ所を見るのが、何よりの楽しみです。

無邪気で、憎気がなくて、面白いものですよ。余り私が始終見ているものですから、しまいには向うから私になずいてきましてね、私のことを小父ちゃん小父ちゃんって云うんです。時々煎餅なんかを買ってやると、喜んで食べてくれますよ。手ぶらで行くと、小父ちゃん何か買っておくれようって、寄って来てねだるんです。あの辺には駄菓子屋がいくらもありますから、私は餅菓子だの、

飴ん棒だの、面子めんこだの、いろんな物を随分買つてやりましたよ。お蔭で貧乏しましたがね、子供のためだから苦にはなりません。だけど、子供に貧乏だつてことを知られるのは、親としての恥さらしですね。小父ちゃんはこの様な物を食べてるの、と云われた時には、私もつくづく赤面しました。」

彼は恥しそうに微笑まで浮べた。

「ああその子ですか、私の家へ遊びに来たんです。眼のまんまるいくるりとした、五つか六つの女の子です。夕方でしたが、私に家に帰りかけると、後からおとなしくついて来るものですから、私はもうすっかり嬉しくなつて、家の中へ引入れました。子供は嬉しそうでしたよ。きよろきよろ室の中を見廻していましたが、

やがて馴れてくると、机の抽斗ひきだしの中をかき廻したり、茶箆筒の中のを持出したりして、おとなしく遊びました。ただ困ったのは、食事のことです。その頃私の家には女中がいなくなつて、私一人きりだったものですから、昼間会社へ出かける時には、家を閉めてゆくことにしていました。そんなわけですから、晩飯の仕度は自分でしなければならなかつたのです。所が子供を一人留守さして物を買ひに出かけるのも、何だか物騒だという気がしまして、仕方なしに有り合せの物で間に合せることにしました。丁度海苔と沢庵とが残っていましたから、それを子供と二人で食べました。贅沢な子供で、お肴がほしいとか鶏卵たまごがほしいとか云うので、それをあやすのに弱りました。がまあ兎も角も食事を済まし

て、それから面白い話なんかしてやつてるうちに、子供はもう眠
くなくなったとみえて、妙に黙り込んで眼をしばしばさせます。私は
すぐに布団を敷いてやりましたが、布団を敷いてるその最中に、
子供はいきなりわっと泣き出しました。泣きながら、お母ちゃん
の所へ行きたいと云うんです。私は小さな押入を開いて、その中
の新しい位牌をさしながら、お母ちゃんはあすこにいるから、
お父ちゃんとおとなしくねんねするんだよ、としきりになだめす
かしましたが、子供は頭を振って、猶ひどく泣き出すんです。し
まいには表へ駈け出そうとします。私もあんなに弱ったことはあ
りません。それでも子供はどうやら私の膝の上で、泣き寝入りに
眠ってしまったものですから、私はそれを抱いて寝てやりました。

あなたは子供の匂というものを御存じですか。」

彼はしまりのない薄い唇をなお弛めて、一人でにやにや笑い初めた。

「甘酸っぱいような妙な匂ですよ。牛乳の腐りかけたのがありま
すね、あんな風な匂です。でも子供によつて多少違いますね。そ
の甘酸っぱいのに、汗の匂を交えたのもあるし、黴の匂を交えた
のもあるし、薄荷の匂を交えたのもあるし、レモンの匂を交えた
のもあつて、いろいろです。向うに寝てる子供なんか、屹度薄荷
の匂の交つたやつですよ。」

彼は小鼻の横に皺を寄せて、うそうそと微笑んだ。

「それから子供の身体は、思ったよりも頑丈ですよ。まるまると

肥っていても、妙に骨の節々ががっしりしているものです。ただ指の先と頬辺とだけは、餅のように柔かくつるつるしています。

この骨の節々が太くて指先と頬辺とが柔かいほど、子供としての価値ねうちがあるんです。骨組がひよろひよろしていて、頬がざらざらしてるのなんかは、全く駄目なんです。あなたはそう思いませんか。」

「そうかも知れません。」と、私はぼんやり答えた。「そして、その子供はどうしました。」

「その子供って……ああそうですか。翌朝帰してやりましたよ。私は保険会社に勤めているものですから、毎日出かけなくちやありません。子供を一人で一日留守さしとくわけにもゆきませんか

ら、翌朝になると、根津様の中に連れて行って、また今晚お出で、と云つて放してやりますと、喜んで飛んで行きます。けれどもうそれから、二度と姿を見せませんよ。変ですね。それでも私は平気です。他にいくらも子供はいますからね。時々私の家へ泊りに来てくれます。私はその時の用意に、絵本や玩具を沢山買つておきました。然し子供は正直な者ですね。それを私がいくら持たしてやろうとしても、朝になると妙にしりごみして、一つも持つて行きません。また私の方でも、強いてそれをくれてやろうと思うような子は、まだ一人もありませんでした。いい子だと思つても、夜中になつていやに泣き出したり、どこか気に入らない点があつたりして、本当に理想通りなのは、なかなかあるものじやな

いんです。ただ一人、これならと思うのがありましたが、それには失敗してしまいました。

「根津様の中に遊んでる子供は、二つ三つの小さなのは別ですが、大抵誰もついてる者はいません。所が中に一人、七つばかりの子で、いつもぱつとした美しい着物をきて、新らしい真赤な足袋をはいて、房々とした髪の毛を少し縮らして、十五六の女中を連れてるのがいました。白目が青いほど澄み切って、小さな黒目でじつと物を見る眼付が、何とも云えず可愛いんです。私はその子に、何度も菓子やなんかをやろうとしましたが、どうしても受取ろうとしません。ついてる女中がまた気の利かない奴で、お嬢さまにそんな物を差上げると私が叱られます、とこう云うじゃあ

りませんか。でも私は、一度はその子を家に泊めようと思つて、機会を狙つていました。おとなしいわりに胸幅の厚い所を見ると、屹度骨の節々がくるくると太いに違いありませんし、一度一寸突つついた所では、頬辺にみつちりみがいって、その上もちやもちやつとした柔かさです。私はその子を一晚抱いて寝てやりたくなりしました。するうちに、とうとう或る日の夕方、まだ薄日がさしていましたからそう遅くもなかつたようですが、その子が一人で根津様の門の前に立つて、鳩に餌をやつてるのを見付けました。私は静に寄つていって、そつと肩に手をかけて、面白い物を見せてあげるからいらつしやい、と云つてみました。子供はきよとんとして、私の顔を不思議そうに見上げました。で私はその手を取

って、いい子ですねとか何とか云って、あやしなから歩き出そうとすると、ふいに大きな声で泣き出してしまったんです。私の方が喫驚しましたよ。その上すぐに、何処からかいつもの女中が馳け出してきて、何をなさるんです、とけたたましい声で私を叱りつけて、力一杯に突きのけたものです。私は本当に驚きましたが、その驚きが静まって、にこにこ笑っていますと、女中は子供を連れて、向うへ走って行ってしまいました。それきり、その子は一度も根津様の中に姿を見せませんでした。実に残念なことをしました。」

彼は一寸眉根を寄せたが、またにこにこ笑い出した。

「でもあの子一人に限ったことはありません。またどんないい子

が何処にいるかも知れませんか。穢い着物をきていたって、立派な身体をしてるものもあるものです。私はなお時々、見当をつけては子供を家に引張り込みました。すぐに泣き出すので、そのまま帰してやったのもありますが、一晩おとなしく泊ってゆくのもありました。所が可笑しいんです。或る夕方、やはり一人の子を引張つて来ようとする、烏打帽を被つた眼付の悪い男が、横合から不意に飛び出してきて、私の手首をいやというほどねじ上げたんです。貴様だろう子供を誘拐するのは、とそう云うじやありませんか。私は笑い出してやりました。こんなに子供を可愛がつてる私が、子供を誘拐したんだそうです。馬鹿馬鹿しくてお話にもなりません。それでも私は否応なしに、警察まで引張つて

ゆかれました。物の道理の分りそうな分別くさい顔をしながら、其処の人達の云い草が可笑しいんです、それならばなぜ貴様は女の子ばかりを誘拐するのか、ですつて。だつて考えてごらんさない、本当に子供だという感じのするのは、女の子に限るじゃありませんか。その上私の子供も、やはり女の子だったんです。」

彼はひよいと首を縮めて、私の眼にじつと見入つてきた。その瞳の据つた曇つた眼付に、私は何だかぎくりとしたが、さあらぬ体で尋ねかけた。

「そのあなたの子供はどうなつたんですか。」

「死にましたよ。母親と殆んど一緒でした。私はその子を余りに可愛がらなかつたようです。いや、子供は可愛かつたんですが、

母親がさほど可愛くなかったものですからね。東京の者で、私より三つも年上で、癩癩持ちでしてね、始終私をいじめてばかりいました。意気地なしだの、愚図だの、馬鹿だのと云って、頭ごなしにやつつけるんです。時には癩癩まぎれに、女にも敵わない弱虫ですかって、私をさんざん小突き廻すことさえあるんです。それなら初めっから、私と一緒にならなけりやいいんですがね、私はその女のお影で、学校はしくじるし、身体は悪くするし、さんざんな目に逢いましたよ。それでも女は、私を大事にはしてくれたんですね。着物の着方から下駄のはき方から言葉附まで、一々教えてくれましたからね。私が保険会社に出るようになったのも、女が奔走してくれたからなんです。所が子供が出来る、もう私

なんかはそっちのけにして、一切構つてくれないんです。一日中飯を食わせないこともあるんです。私だつて癩に障るじやありませんか、瘦我慢にも知らん顔をして、一度も子供を抱いてやったことさえありません。所が子供が三つの時、女は赤痢にかかつて死にました。子供もやはり赤痢とか疫痢とかで、殆んど同時に死にました。そうですね、去年の秋でしたよ。私は二人を一緒に、女の家の墓へ葬つてやりましたが、いいことをしたような気もしますし、残念なことをしたような気もします。然しまだ間に合います。火葬にしたのですから、子供の骨はいつでも取出せるんです。今だつて取出せますよ。なかなか腐るものじやないんですよから。ね、そうでしよう。」

彼は口を尖らせて、私の答えを待ち受けるものようだった。

私は云った。

「大丈夫ですとも。だって去年の秋のことでしょう。」

「ええ、去年の秋……そうです。それから私はずっと、子供のこ
とばかり考えてきました。なぜもつと可愛がってやらなかつたら
うかと、そう思うとはつきり顔が見えてきます。始終にこにこ笑
っていましたよ。死んだ時にも笑っていました。片方の目を細く
開き口を開いて笑ってるものですから、それを閉じさせるのに骨
が折れたくらいです。あの時は三つでしたが、四つ……五つ……
六つ……と、だんだん可愛くなるばかりです。生きてたらもう私
と一緒に、公園なんか散歩するでしょう。そろそろ学校へも上る

頃ですね。屹度よく出来るに違いありませんよ、利口な子でしたからね。そしてだんだん綺麗になってゆくんです。母親は綺麗じやありませんでしたが、不思議に子供は上品な立派な顔をしていました。がそれももう、ずっと昔のことです。どうかすると何もかもぼんやりして、忘れそうになることがあります。そんな時私は、堪らないほど淋しい陰鬱な気持ちになります。然しまたすぐに諦めます。子供はいくらも世間にいますからね。いつでも何処にでも、あり余るほど沢山います。子供がこの世にいなくなることは決してありません、決してないんです。」

彼は一寸鹿爪らしい顔付になって、眼の曇りが薄らぎ底深い空洞を示しかけたが、それがまたふつと曇ってきて、口許ににやり

と薄ら笑いを湛えた。

「子供は温かなものですよ。ほかほかとした何とも云えない温かさです。一寸他に類がありませんね。ごらんなさい。向うに母親の膝を枕に眠ってる子がいますでしょう。あの母親の膝なんか、ただ子供の頭がのっかってるだけで、炬燵にはいったのよりもっと気持よく、ぽかぽかと温ってるに違いありません。」

そして彼は、もう私のことなんかは打忘れたかのように、その母と子とから眼を離さずに、時間を置いてはにやにや薄ら笑いを洩らした。私はかなりの間彼の様子を見守っていたが、ついに待ちきれなくなつて云い出した。

「それから、あなたはどうしましたか。」

「え？」

彼は向直つて、不思議そうに私の顔を見た。

「警察に連れて行かれたというお話でしたが、それから……。」

「警察……ああそうですか。実に馬鹿馬鹿しい所ですよ。高い格子窓のある暗い室に押込まれましたがね、碌に食物も布団もくれないんです。そして、眼鏡越しに人をじろじろ見るくせに、いやに丁寧な言葉付をする、口髭のある男がやって来まして、私を明るい広い室に連れ出したのはいいんですが、一から百までの数を云つてみるとか、何年何月何日に幾日を加えれば何年何月何日になるかとか、まるで小学校の算術のようなことをやらせるんです。それからまだいろんなことを尋ねましたっけ。しまいには私の眼

の玉をひっくり返したり、胸に革帯のようなものをあてて聴いてみたり、体操をさしたりしましたよ。それで私はすっかり悟ったんです。皆して私を狂人扱いにしてるんです。私は癩に障って、狂人じゃないんです、と大声に怒鳴ってやりました。そしてもう何を聞かれようと、一切知らん顔をして黙っていました。それからすぐに、小樽の叔父に引渡されました。どうしてそんなに早く叔父が、小樽から東京へ来たのか不思議です。叔父は私を叱ったりなだめたりして、小樽へ連れ帰ろうとするんです。余り子供を可愛がりすぎるから、東京にいてはいけないんだそうです。不思議な理屈じゃありませんか。私がそれに逆らおうとすると、一体あんな女に引つかかったのがそもそも間違だ、とそんなことを

云つて叱るんです。かと思うとまた、小樽には可愛い子供が沢山いる、などとやさしいことを云うんです。私は笑つてやりましたよ。叔父までが私を狂人扱いにしてるんですからね。それでも今こうして、小樽へ連れ戻される所です。」

そして彼が横手の方の座席をじろりと見やったので、其処に寝てる連れの男が彼の叔父であることを、私は察し知った。

「ただ少し自分でも不思議なことがありますかね。」と彼はごく低い声で囁くように云い出した。

「人間がみんな棒杭のように見えることが、時々私にあるんです。その棒杭がふいに歩き出したり声を出したりするので、可笑しな気持になるんです。何かで私はこういうことを読むか聞かした

ことがあります。長い間監獄にはいつてた男が、俄に放免されて世間に出ると、いきなり其処の立木に向つて、何やかやと話しかけたそうです。その男には屹度、立木が人間に見えたのでしよう。所が私はその反対です。人間が棒杭に見えて仕方ないんです。やはり頭が少し変になつてるのかも知れませんね。然し自分で自覚してる間は、決して真の狂人じゃないそうですが、本当でしようかしら。」

「それはそうかも知れませんが」と、私は答えた。

「そうですね、いや確かにそうです。所がまた不思議なことには、子供は決して棒杭には見えたことがありません。子供だけが生きてぴんぴんしています。子供はいいです。世界中で何もかも木で偶く

の棒ですが、子供だけは生々と跳ね廻っています。にこにこつと笑う笑顔つたらありませんよ。私の子供もよく笑ってばかりいましてつけ。私がそれにつり込まれて、にこにこ笑い出すと、子供達の方から私になずいて、私の側に寄ってくるじゃありませんか。根津権現の中には、いつも大勢子供が遊んでいますよ。女の子も沢山います。私の家へよく泊りに来たものです。」

そして彼はまた、斜め向うの女の子を眺め初めた。

「そんなに子供がお好きでしたら、」と私は云つてみた、「一人拵えるか貰うかしたらいいじゃありませんか。」

然し彼はもう私の言葉に返辞もしなかった。子供の方を一心に眺めながら、時々変な独り笑いを洩らしている。私も仕方なしに

黙り込んで、列車の響きに耳を貸したり、車室の中をぼんやり見廻したりした。向うの隅で一人すばすば煙草を吹かしてゐる者を除いては、大抵皆いぎたなく居眠つて、空気はどんよりと濁つていた。

だいぶたつてから、彼が不意に飛び立ったので、私は喫驚して眼を見張つた。彼の見つめてゐる方を見ると、向うの女の子が寝返りでもしたらしく、向う向きにつつ伏してゐて、母親が半ば眠りながら本能的な手付で、その背中を無心に軽く叩いてゐた。男はつつ立つたままその方を見ていたが、やがてがくりと座席に腰を下して、マントの襟に顎を埋め、両手を胸に組み、眼を閉じて、いつまでたつても動かなかつた。私は長い間、その狂人とも常人

とも分らない男を、陰鬱な気持で見守っていたが、変に不気味な
圧迫を感じてきた。恐らく彼は、私や他の凡ての乗客を棒杭のよ
うに思つて、そして自分も棒のようにじつと坐り込んだのである
う。

汽車はもうとくに盛岡を通過していた。隧道トンネルにさしかかると
魔物のような音を立て、全速力で走っているらしかった。私は窓
の硝子の曇りを指先で拭いて、外の景色を透し見たが、ただ暗澹
とした夜だけで、何一つ眼にはいるものもなかった。私はまた空
気枕に頭を押しあてたが、変に不安な気持に頭が冴えて、なかな
か眠れそうになかった。前の腰掛の男は、眠つてるのか覚めてる
のか、先程の通りの姿勢で、棒のようにじつと坐っていた。私は

それをまた長い間見守っていたが、眼に疲れを覚えてくると、ぐりりと横手へ向きを変えて、腰掛の背にもたせた枕へつつ伏した。そしていろんな幻を見たようだったが、いつしかうつとりと寝込んでららしい。

私が眼を覚した時には、もう白々と夜が明けていた。車室の中がざわめいているのに、喫驚して身を起すと、汽車は浅虫を出たばかりの所だった。もうじきに青森だなどと思って、下車の仕度に枕の空気を出しかけて、ふと気付いて眺めると、前の席の男は、やはり腰掛の真中に棒のように坐っていたが、頭を軽く動かしながら、如何にも嬉しそうな笑顔をにこにこさしていた。私はその笑顔を眺めて、軽い驚きを覚えた。夜分に電燈の光で見た彼の笑

いには、何だか呆けた空洞な無気味さがあつたけれど、それが、今は、夜明けの微光に輝らされたせいばかりではなく、如何にも晴れやかな輝きに充実してゐるようで、^{おの}自ずと人の心を惹きつけるものを持つていた。それでもやはり、彼の眼には灰白い曇りがかかつており、彼の薄い唇にはだらけた弛みがあり、額や頬の皮膚は色艶の褪せたただ白さを示していた。そういう眼や口や頬に、どうしてそんな輝かしい笑いが浮べられるか、全く不思議なほどだった。而も私がお驚いたことには、通路を挟んだ斜め向うの子供が、彼の正面の腰掛の——私が坐つてゐる腰掛の、先の所まで歩いてきて、其処のところ両手でつかまりながら、彼の笑顔にここにこ応じてゐるのだった。二人はまるで友人同士のような風だ

った。それを子供の母親は、まだ若い束髪の婦人だったが、平気で向うから眺めていた。そこへ、彼の叔父らしい連れれの男が、毛革の襟のついたマントを着て、横合から彼の席へ歩み寄って来て、彼と並んで半ば腰を下しながら、しきりに彼の袖を引張り初めた。彼はそれでも素知らぬ風で、やはり女の子に微笑みかけ、笑顔の恰好をごく僅かぴくりぴくりと変えながら、何やら相図をしてるらしかった。

それら一切の情景を見て、私は夜来の彼の話を思い起すと同時に、漠然とした不安を覚え初めた。彼と彼の叔父と娘と娘の母親と、その四人の間に、何か不吉な纏れが起りはすまいかと、しきりに気になり出した。そして私自身も、その纏れに巻き込まれそ

うな気がした。私は半ば腰を浮かせながら、やはりどうにもすることが出来なかつた。

けれどそれは、ほんの僅かな間のことだつた。その情景は突然不作法に破られた。娘が彼の笑顔につり込まれて、腰掛の端から一足踏み出すか出さないまに、彼の叔父は俄に立上つて、二人の間に立塞がつた。彼は笑顔をそのままぼかんとした顔付になつたが、次の瞬間には、もう何等の感情もないらしい没表情な顔付で、首を縮こめてしまった。子供の方はいつのまにか元の席に戻つて、母親へ何やら戯れかけていた。

私は彼のために、何となく気の毒な感じがした。然し彼はもう、私の存在も叔父の存在も、否子供の存在さえ、忘れはてたものの

ようだった。子供の方へ眼をやりもしなかった。叔父から何か云われても、ぼんやりした様子で黙っていた。私は叔父が手荷物を片付けてる間に、彼へ言葉をかけてみた。

「今朝ほどはお眠りになりましたか。」

返辞がなかった。私はまた云った。

「すぐ連絡船で向うへ渡られるのですか。」

その時彼は初めて返辞をした。然し「ええ」と答えたのか「いえ」と答えたのか、私には聞き取れないほど低い声だったし、またどちらでもよいというほど気乗りのしない様子だった。私は張合がぬけて、もう何にも話しかけなかった。

暫くすると、彼は俄に立上って、棚のバスケットから林檎を一

つ取出した。そしてその真赤なやつを、皮のままかじり初めた。さくりさくりと齒切よくやつてる様子を、私は横から見守ったが、病癪が進んできたなら、子供の赤い頬辺をもそんな風にかじるかも知れない、などとふと考えて、彼を憐れむ気が起ると共に、一方では、羨望に似た憎々しい気も起った。そして煙草をやたらに吹かした。彼は林檎を半分ばかりかじると、それを足下に投げすて、じつと棒のように坐ったまま、曇りのかかつてる眼を空に据えた。そしていつまでも身動き一つしなかった。

そのうちにも私は、下車の仕度をしなければならなかった。手提鞆の中に、初め通りうまく品物がはいらないので、何度もつめ直してゐるうちに、汽車は青森に着いた。一度に乗客が立上った。

彼はまだじつと坐っていたが、手荷物を両手に提げた叔父に促されて、バスケットと帽子とを大事そうに抱えながら、叔父の先に立って降りていった。長い髪の毛を少し乱し、黒羅紗のマントを着けてる、その痩せた背の高い後ろ姿を、私は人込みの中に見送った。

手荷物を窓から赤帽に渡してしまうと、私は急いで彼の後を追っかけた。然し騒々しい人込の中に、彼の行方を見失ってしまった。

連絡船に乗ってからも、私はなお彼を探してみた。海の上で朝日の光の中で、も一度彼と話がしてみたかった。然し彼の姿は何処にも見えなかった。或は二等室の方にまぎれ込んでやすまいか

と、その方をも探したが、彼もその叔父も見当らなかつた。それから私は、あの母親と娘とをも探してみたが、それも見付からなかつた。

そして私は、変に気懸りな気持へ陥っていった。曇りかかつてる眼としまりのない薄い唇とを、まざまざと頭の中に描き出しながら、船の甲板の上に佇んで、朝日の光の下に茫と霞んでる青森の山々が、次第に後方へ遠く残されてゆくのを、ぼんやりと眺め耽つた。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第二卷（小説2 [# 「2」はローマ数字、1-13-22]）」未来社

1965（昭和40）年12月15日第1刷発行

初出：「女性」

1924（大正13）年3月

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2007年8月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

林檎

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>